

類のない国語軽視のわが国

悪平等の弊は、学校教育における教科の編成と、時間配当においては「国語軽視」となって現われている。あるいは「国語は重視されている。その証拠に国語の学習時間数が諸教科の中で最も多い」と言っていて反対する人があるかも知れない。

国語の時間が最も多いことは事実である。だが、国語の時間の、全体の学習時間に占める割合は四分の一から多くて三分の一しかない。諸外国では、全体の半分もしくはそれ以上を国語が占めているのである。

わが国では、小学校の一年生から社会科や理科など多くの教科を設けて、間口の広い学習をさせている。間口の広いこと、それ自体は決して悪いことではないが、そうすると一教科に割当てられる時間数が少なくなる、という弊を避けることが出来ない。

とりわけ、わが国では、数多い教科を、それらにさほどの軽重もつけずに時間を割当てているため、重要な教科ほど学習時間が足りな

くなっているのである。

外国では、どこの国でも、三年生までは社会科や理科などの教科を立てずに、あらゆる教科学習の基礎である国証学習に、重点的に多くの時間を割当てている。その一例に、東ドイツの三年生の教科とその学習時間を次に示してみよう。

週あたり時間総数 24 時間

国語科 14 時間

算数科 6 時間

図工科 1 時間 20 分 (40 分 × 2)

音楽科 1 時間 20 分

体育科 1 時間 20 分

三年生までは五教科しかないのである。しかも、図工・音楽・体育の三教科の合計がわずかに 4 時間にしかならない。それに引きかえ、国語は一教科 14 時間も占めているのである。一時限を 40 分とすると、これは 21 時限に当たる時間である。毎日、三時限もしくは四時限が国語学習の時間だということになる。わが国では、毎日、一時限もしくは

は二時限しかなく、合計が七時限であるから、東ドイツはわが国の三倍も国語学習に時間を当てていることになる。

しかし、これは東ドイツに限ったことではない。西ドイツも、またイギリスもフランスも、ソ連も中共も、ほぼこれと同じ程度の「国語科重視の教育」をしている。ひとりわが国だけが「国語科軽視」の教育をしているのである。

考えていただきたい。社会科の学習でも理科の学習でも、まず教科書を“読み”これを理解できないことにはその学習を進めていくことは不可能である。だから、どんなに社会科や理科の学習時間を多く設けてあっても、“読み”の能力が低いことには、教科書に述べられている内容を理解することが出来ず、仮に出来たとしても、その理解は不十分なものに決まっている。

また、“書き”の能力が低くては、どんなにりっぱな研究が出来たとしても、それを正確に表現することが出来ず、記録できないことには学問としての完成はなく、従って学問の発展はない。

“読み”や“書き”は、社会科や理科を初め、あらゆる教科の学習を

進めていくために絶対に必要欠くことの出来ない能力である。だからこそ、どこの国でも、全体の学習時間の半分、もしくはそれ以上の時間を国語科に割当てているのである。

ところが、わが国では国語科を他の教科と全く同列に扱い、時間を総花的に配分したため、世界に類例のない「国語科軽視」の教育になってしまった。その結果、高校はおろか、大学を卒業しても、新聞も満足に読めず手紙一つ書けない者が多いという、情けない現状を招いた。

それは明らかに“読み・書き”学習の足りないことの結果であり、それはわが国に^{びまん}瀰漫している「悪平等」の教育観が招いた病弊である、と言わなければならない。